

伴野朗

始皇帝

徳間書店



伴野朗

始皇帝

徳間書店

上

始皇帝^上

著者 伴野朗

第一刷 一九九五年一月三十一日

第四刷 一九九五年四月一五日

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区東新橋一―一六 郵便番号一〇五―五五

電話(〇三)三五七三―〇一一(代表) 振替 〇〇一四〇―〇―四四三九二

印刷所 株式会社清菱印刷

カバー印刷 近代美術株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価は帯・カバーに表示してあります。落丁・乱丁はお取替へいたします。

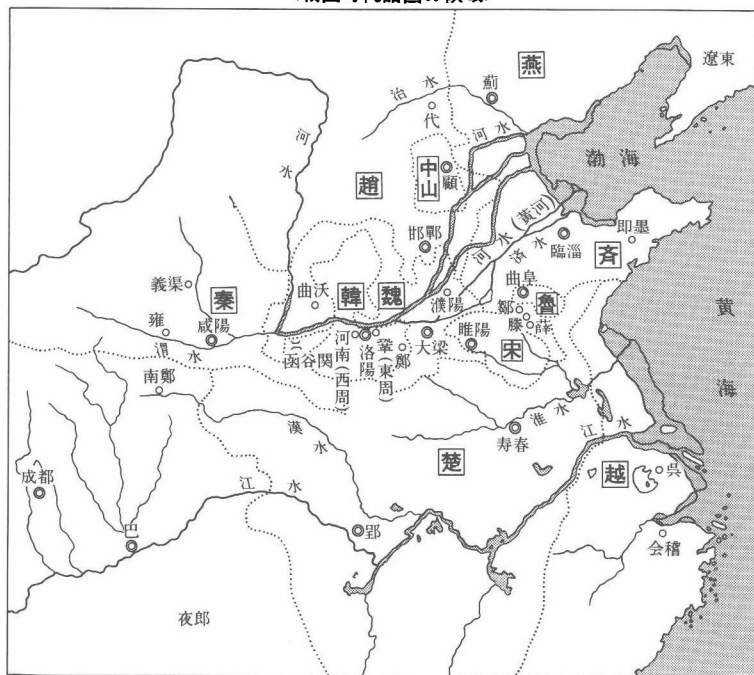
© R6 Tomono 1995 Printed in Japan

(編集担当 高田晩郎)

ISBN4-19-860225-5

始皇帝上

〈戦国時代諸国の領域〉



地図製作・協立社

謀	謀	即	誕	奇	野	プ	目
						ロ	次
						ロ	
						ー	
						グ	
略	臣	位	生	貨	望		
239	198	150	103	56	12	5	

装幀・田淵裕一
題字・荒川玄三郎

プロローグ

1

秦皇^{しんのう} 六合^{りくごう}を掃^{はら}い
虎視^{こし} 何ぞ雄^{ゆう}なるや
劍^{けん}を揮^{ふる}つて浮雲^{ふうん}を決^けし
諸侯^{しよこう} 尽^{ことごと}く西^{せい}に来^きる
明断^{めいだん} 天^{てん}より啓^{ひら}き
大略^{たいりやく} 群才^{ぐんさい}に駕^がす
兵^{へい}を収^{おさ}めて 金人^{きんじん}を鑄^{ちゆう}し
函谷^{かんこく} 正^{せい}に東^{とう}に開^{ひら}く
功^{こう}を銘^{めい}す 会稽^{かいけい}の嶺^{れい}
望^{のぞみ}を騁^はす 琅邪^{ろうじゃ}の台^{だい}
刑徒^{けいと}七十^{しちじゅう}万^{まん}

土を起す 驪山の隈

尚お不死の薬を採り

茫然 心をして哀しましむ

連弩 海魚を射

長鯨 正に崔嵬

額鼻は五岳に象り

波を揚げて 雲雷を噴く

鬐鬣は青天を蔽い

何に由ってか蓬萊を觀ん

徐市 秦女を載せ

樓船 幾時か回る

但だ見る 三泉の下

金棺 寒灰を葬るを

唐の詩人李白が、約九百七十年昔の秦の始皇帝の一代を詠った詩である。『古風』其三として知られている。

始皇帝の雄才大略な生涯をやや斜めに眺めながら、人生の虚しさを詠じて、あますところがない。

始皇帝のイメージには、毀誉褒貶がある。戦前は「焚書坑儒」に代表される「暴君」の印象が

強かった。

ひるがえって、現代中国では、法家を擁護し、中国を統一した指導者として高い評価が与えられている。

特に始皇帝の評価が高かったのは、プロレタリア文化大革命の時期だった。なかでも、一九七三年は、その一大キャンペーンが張られた年であった。

まず、九月二十八日付『人民日報』は、施丁していの論文「焚書坑儒を弁ず」を掲載、十月二十五日付では石侖せきりんの「儒者尊重、法家反対を論ず」、同三十一日付の陝西師範大学習班の「秦の始皇帝は断固として奴隷主の復活に打撃を加えた政治家である」、「紅旗」十一号の羅思鼎ろしていの「秦王朝設立過程での復活と反復活の闘争」と、矢継早に論陣が展開された。

なかでも、施丁論文は「焚書坑儒」を真正面から擁護し、当時の研究者たちをあつといわせた。その要旨を紹介する。

——秦の始皇帝の「焚書」は決して文化を破壊しようとしたのではなく、書籍を焼き尽そうとしたのではない。魯迅も『准風月談』じゆんふうげつだんのなかでいつているように、始皇帝が書物を焼き棄てたのは、思想を統一するためであった。始皇帝はただ、秦の史書を除く、各国の史書と民間に私蔵されている『詩経』『書経』、諸子百家などの書籍を焼却したに過ぎない。

博士官の役所にある書籍は焼いてはおらず、すべての医薬、卜筮うらなひ、農事に関する書についても、焼却していない。これによって、始皇帝の「焚書」は、限定的なものだったことが肯定できる。

また、「坑儒」は、復古を主張する反対派に加えられた打撃であり、決してすべての儒家を殺戮したわけではない。郡県制に賛成した周青臣しゅうせいしんと法家の意見を尊重した儒家は、危害を加えられて

いない。漢初期の著名な儒家である伏生^{ふくせい}、叔孫通^{しゅくそんつう}、陸賈^{りくか}らは皆、この当時、いかなる迫害にもあつていない。「坑儒」事件のあとも、秦王朝のなかには依然として博士、儒家が存在していた。

「焚書坑儒」はその性質からいえば、当時、旧勢力が権力を奪取して、再び帝位につこうとすることに反対し、「現状を尊重した」進歩的措施である。

「焚書坑儒」は、当時、新たに支配権を確立した地主階級と、政治の舞台を降りた奴隸主貴族の一つの政治闘争であり、中国統一後まだ日の浅い秦王朝が、旧勢力の復古の陰謀を粉碎したのであり、新封建統治の初の果敢な行動であつた。これは、この時期において、完全に必要な措置であつた。

当時、始皇帝は毛沢東に比定されていたフシがある。始皇帝評価は、毛沢東礼賛の延長線上にあつた、と考えられる。だが、それはそれとして、始皇帝評価は、歴史の正しい一面だ、と思う。紀元前二二一年という時点を境に、中国は変つたのである。いわずと知れた、始皇帝の中国統一の年である。

それまで中国は、諸国が分立していた。いまのヨーロッパを考えればいい。当然のことながら、その当時、中国にいわゆる統一指向はなかつた。

始皇帝の統一以来、統一指向が中国を律する、強力な政治理念となつた。統一の方向に向かう時、この国は最大の政治エネルギーを発揮するようになった。

北方異民族の支配を受けた時、中国人は漢族統一王朝の設立を目指した。統一は、いまでも中国の最も強烈な政治理念である。

——中国は一つ。

を標榜するあまり、いまの中国は時差制をとっていない。時差三時間はある西域諸地域も、北京時間で「統一」されている。

また、実際に則すれば、真剣に検討されるべき連邦制についても、現在のところ実現不可能である。統一理念が邪魔をしているのだ。

このように、統一指向は問題も含んでいる。だが、とりも直さず、中国を律する最大の政治理念であることには変りはない。

始皇帝は、それをつくり出した人物として記憶されるべきである。その功罪は歴史を通じて問われているが、いかなる悪評も、彼の統一事業をもつてすれば、それらを相殺して、なお余りあるものだ。

秦 (Chin) の名が、英語の China を生んだのもむべなるかなである。

清末の外交官だった薛福成は、その『出使日記』のなかで、

——欧州の各国、たとえば英国では中国人のことを「采衣納^{チャイニーナ}」と呼び、法国では「細納愛^{シノワヰ}」と呼ぶ。また中国を呼ぶに英人は「采衣納^{チャイナ}」、法人は「細納^{シニア}」、義人は「斯納^{チナ}」、徳人は「赫依納^{ヘイナ}」、ラテンの音では「西奈^{シナイ}」である。そのいづくに義を取るのかと問うならば、すべて秦字の訳音なのである。

と、書いている。

西安には、二度いったことがある。いうまでもなく、昔の古都長安である。始皇帝の都咸陽は、渭水を挟んで北岸にある。

西安の地の最大の見物は、始皇帝の兵馬俑坑である。一九七四年、農民が畑に井戸を掘っていて、深さ五メートルの地中で、一個の兵士俑を掘り当てた。これが、あの八千個に及ぶ地下兵団の大発見のきっかけだった。

地下兵団は、始皇帝陵の東に位置している。東から襲来するもろもろの敵から始皇帝陵を守る位置にある。

兵馬俑坑を見た帰りには、必ず始皇帝陵に登ることにしている。項羽が秦都咸陽（陝西省咸陽）を攻めた時、陵を掘り返し、財宝をすべて奪った、と史書は伝えている。だが、ここに登ると、始皇帝の眼になることができる。

彼は十三歳で即位した直後から、自分の陵の建設を命じている。それだけに、この陵の頂に何度も足を運び、周囲の風景を楽しんだに違いない。地下兵団を埋設する場所も自らが選んだのではないか。その始皇帝の視線を自分も持つことができるのだ。

そして、陵の頂でいつも思うことがある。

——あの桑原隲蔵氏も、この地で始皇帝の視線を共有されたのだ。

桑原氏は、日本東洋史の泰斗である。彼は明治四十年（一九〇七年）、この地を訪れ、その旅行

日誌を残している。一九〇七年というと、実力者西太后が死ぬ一年前、清朝が瓦解する辛亥革命が四年後に迫っている。

桑原氏の日誌のうち、始皇帝の業績に触れた部分を紹介したい。

——十月十日 雨……。

蓋し始皇は不世出の豪傑なり。支那四千年の史乘、始皇の前に始皇なく、始皇の後に始皇なし。曠々たる者察せず、漫に悪声を放ち、耳食の徒随つて之に和し、千古の豪傑をして、枉げて桀紂と伍せしむ。曰く古経を焚く。曰く儒生を坑にす。世挙げて其暴を責む。然れどもこれ当時必要の政策にして、始皇以前已に実行せられ、又唱道せられしもの。曰く仙薬を求む。曰く墳墓を崇くす。世を挙げて其愚を嗤ふ。

然れどもこれ当時流行の風潮にして、独り始皇のみ然りしにはあらず。彼の実施せし郡県制度、中央集権は、爾來歴代の循奉する所となりて今日に至り、聖人出ずると雖も、復易うべからざるにあらずや。

予は平生始皇に好意を表し、同情を有する者、筆に口に、已に其幾分を公にせり、今親しく驪山の下に來りて、其長山を弔す。始皇の遺靈果して知るや否や。時に黯雲幕々、悲雨蕭々たり……。

桑原氏の辞に心を奮い興して、始皇帝の物語を紐解く旅に足を踏み出そう、と思う。

野望

1

時は、秋である。

たけなわの秋。蒼穹^{そうきゆう}は、なんの遠慮もなく、高く高くただ晴れ上がっていた。まさに、天高く、馬肥える季節である。

後世の史家が、

——戦国。

と呼ぶ時代の後半に差しかかっていた。弱肉強食のサバイバル・ゲームが、中国の大地で展開されていた。

秦都咸陽^{かんよう}（陝西省咸陽^{せんせい}）に向かう往還は、活気に溢れていた。

秦の昭王四十二年（紀元前二六五年）十月——。

山々の木々は錦を着たかのように紅葉していた。往還をゆっくり歩く壮漢がいた。供を一人連れている。

身形は商人風だが、筋骨は逞しく、意志の強そうな容貌をしていた。全身から異能といつていい不思議なエネルギーが発散されていた。

特記すべきは、その双眸であつた。漢族には珍しい紫がかった瞳をしていた。その瞳の色が、彼の心の動きを隠していた。これまで他人に表情を読まれたことのない男だつた。それが、今日の成功を勝ちとつた原因の一つかもしれない。

男の名は、呂不韋である。字は子孝。衛の濮陽（河南省濮陽）の出身だが、韓の陽翟（同省禹県）で財を成した投機商人である。

陽翟は、韓都が鄭（同省新鄭）に移るまで都だつたところで、街の北側を潁水という大河が流れている。河南の交通拠点である。

彼の父親が職を求めて衛から韓に流れてきた。彼は、もの心がついたころから潁水を見て育つた。

韓に来てても貧乏暮しは変らなかつたが、その希代の商才によつて、三十四歳にして巨万の財を成した。

呂不韋が金儲けのコツを会得したのは、虚空山人と名乗る老人によつてであつた。

彼が十七歳の時であつた。当時、陽翟の大地主蔡家の下働きをしていた呂不韋は、潁水のほとりで奇妙な老人と会つた。老人は疲れ果て、その衣服は埃と泥にまみれていた。

夏の暑い盛りだつた。河原では、旨そうな梨が売られていた。老人はよほど喉が渴いていたらしく、梨売りに、

「一つ恵んでくだらんか……」

と、懇願した。だが、強欲な梨売りは、

「爺さん、これは挽ぎ立ての上等の梨だ。欲しけりや、お足を持つてきな！」

と、その願いを撥ねつけた。呂不韋はそれを見ていたが、なけなしの銭を出し、梨を三個買って老人に与えた。

彼にとつては、単なる気紛れであつた。その老人が、彼を可愛がつてくれた母方の祖父にどことなく似ていたというのが、柄にもない喜捨きしよの真似事をした理由だつた。

老人は、たちまち一個を平らげた。

「旨かつたよ、若いの……」

老人は、そういつた。

「それは、銭を出した甲斐があつたというもんだ。じゃ、爺さん、達者でな」

立ち去ろうとする呂不韋を、老人が呼びとめた。

「若いの、梨の礼によいことを教えてやろうか」

「爺さん、使いに行かなければならないんだよ」

呂不韋が、いつた。事実、彼は主人から河向うの地主の家まで手紙を届ける用をいい付かつていた。

「時間とはらせない。お前、金儲けはしたくないか？」

「そりゃしたいさ」

「じゃあ、私の話を聞くのだな」

老人は、自信あり氣にいつた。彼は、半信半疑だつた。なにせ、汚ない老人がいうのである。